コメント

菅　基久子

最初に〈禅密一致〉と〈教禅一致〉という表現について。パネル発表の中で、ほぼ同じような意味で使われていたが、〈教禅一致〉〈禅密一致〉という表現は、従来の研究史上、異なる使われ方をしてきたことをふまえておくべきだろう。〈教禅一致〉は、宋代の臨済禅の影響を指摘する際に強調される思想傾向である。禅宗史研究者の間では、密教は日本的なものという解釈が通常だが、その背景には、密教を含まない〈教禅一致〉が基本的観点としてあった。だからこそ、密教を取り込んだ兼修禅が、純粋禅という対立項を立てて、対比的に捉えられてきたのである。一方、〈禅密一致〉は、特に密教と禅が相応するという見地である。密教僧として出発した栄西や円爾が、宋禅を学んだ後も密教を捨てず、むしろ円爾は積極的に実践したことから、禅密が兼修に抵触のない融合可能なものとされ、禅と密教の類似性が注視されてきたと言える。また、これらとは別に、密を含めた教という理解のもとに、より広義の〈教禅一致〉という表現や概念が用いられるケースも出てきている。発表者の使用した「教禅一致」は、密宗を教宗の一つと見る立場から、〈禅密一致〉をも含む、広い意味での「教禅一致」という表現であった。その点を、従来の用法とともに確認しておきたい。

次に、個別発表についての疑問点を簡単に示す。

吉原発表について。円爾は蘭溪同様、見性以前の坐禅について言及しており、見性前の坐禅の意義を認めていない

わけではない。見性前の禅に次ぐ問答で、早くも「行住坐臥」の禅を説いてはいるが、そこから「坐禅の身体性の欠如」「坐禅の欠如」とまで言えるのか、疑問である。円爾は悟りを得るための因行を否定しているが、その因行に仏心宗の禅行は含まれない。円爾の「未だ道を得ざる」段階の坐禅はどう位置づけられるのだろうか。

加藤発表について。菩薩の次第と因行を超越する密教頓入者の成仏は、行業を否定する禅と酷似しているが、禅密一致につながるのだろうか。密教頓行者の到達地点として示された「無相瑜伽」の「無相」は、禅の「無相」と同義ではなく、いわば「無限の相」の意であろう。また、「直入真如門」の密教頓入の機は生滅門・真如門を超えた禅の仏心に直入するとは言えまい。つまり、円爾の言う「禅の仏心」とは一致しないのではなかろうか。

島田発表について。密教の根源を示す阿字の字義と、円爾の禅とが同一内容ではない、との見解は、そのまま加藤発表の後半部分に対する反論になっている。その際に示された、理の有・無で教・禅を区別する基準は妥当だろうか。教が言説化された理であるというが、その理は仏意や仏心、菩提とどういう関係におかれるのだろうか。理の有・無ではなく、理性を因位や果位で考えることの有・無が教・禅を分けているのではないだろうか。

最後に、全体を振り返って。従来の円爾理解は、ほとんど円爾自身の言説に基づいていない。その意味で、円爾自身の兼修の論理及び教・禅の位置づけを、円爾の言に即して明らかにしようという三発表は、それぞれ意欲的な試みであると思う。円爾の著述に即して円爾の思想傾向を捉えた結果、もし、円爾の禅論が教禅非一致、禅密非一致の観点に立つものであるなら、従来の円爾像は、随分違ってくるだろう。宋禅の影響から円爾の教禅一致を論じ、円爾門流を一括して捉えてきた従来の研究は成り立たないことになるのではないだろうか。また、禅密の兼修が、同一の悟りに向かう同等の実践の兼修ではなく、見性後の兼修、つまり、仏心宗の禅の本質とは区別される、現世での慈悲の実践であったとの見方ができると思う。

（武蔵大学非常勤講師）